学級集団づくりのための視聴覚機器や視聴覚教材の活用

－自分のことを肯定的に認め，心温かく豊かな人間関係を形成する子どもを育てる教育活動－

尾花沢市立常盤小学校　　石垣　岳郎

１　テーマの設定

「自分のことを肯定的に認めること。」そのことにより児童は自信をもち，自分の価値を認めていくと考えている。また，そういった思いを持つことで，自分を好きだと感じ大切にする気持ちを育むことができると考えている。また，その思いを持ったものは他者をも尊重し，大切にするようになると考えられる。そのことは，心温かく豊かな人間関係を形成することができる人間として成長していくと考えている。どの子にも自分を大切にし他者を大切にできる子になってほしいと常に思っている。

子どもたちは「自分は認められている」，「居場所がある」と感じれば学校生活に満足できる。そのために本校では,「楽しい学校生活を送るためのアンケートＱ－Ｕ（Questionaire-Utilities)」での学級実態把握や，それに基づき学級を構成する児童の援助や，学級集団の相互作用や関係性を育てる援助を行っている。

本研究では，学級集団づくりのために，視聴覚機器や視聴覚教材を活用して実践していくことを主たるめあてにしていく。

授業では，上記の学級集団への援助ということを考え道徳・学級活動を中心に研究を進めていきたい。どちらも学級経営上中心になる学習であり，自分や他者のことを見つめたりする機会が多いと考えた。１学期に行った道徳の授業で，ＶＴＲを資料として活用した。その際に低学年の児童には話の筋を理解させるのに非常に効果的であることをつかむことができた。そこで道徳では，特に資料の提示や視聴覚資料の開発を行い，価値にせまらせるために活用していきたいと考えている。

学級活動では，学級集団にルールやリレーションを確立するために必要な力をパワーポイントの教材として制作し，実際の授業の中で活用したいと考えている。

２　研究の仮説

（１）仮説Ⅰ

授業の中で視聴覚教材を活用することは価値に迫るための有効な手立てとなるであろう。　～主として道徳における取り組み～

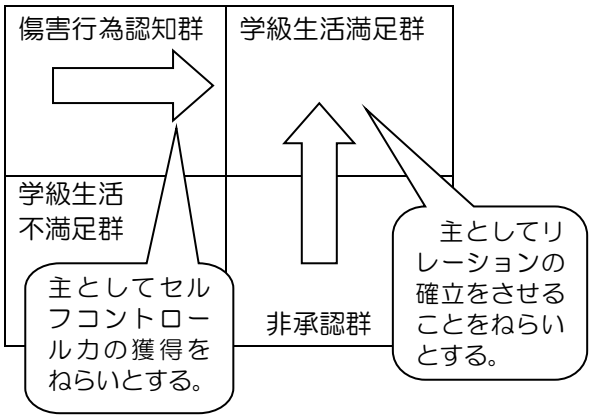
（２）仮説Ⅱ

パワーポイントによるプレゼンテーション教材を活用することは，効果的なスキルトレーニングなどを行うことができるであろう。

～主として学級活動における取り組み～

３　研究の方法

Ｑ－Ｕにより，子どもたちの実態を把握するとともに，子どもたちが生活する学級集団の状態を把握する。その把握した実態をもとに，より良い学級集団作りを行っていく。その際に視聴覚機器や視聴覚教材の効果的な活用法を探る。



（１）年間を通して，道徳・学級活動を中心にどの場面にどのような資料の提示を行うと効果的かを探る。

（２）学級集団にルールやリレーションを確立するために必要な力をパワーポイントの教材として制作し，実際の授業の中で活用する。

４　研究の実践

（１）視聴覚教材を活用した授業実践

【実践例１】命の誕生（第１学年）

生命の大切さは，どれだけ強調してもしすぎることはない。生命の尊重は，人間尊重の基盤である。児童は，動物や，虫など，自分を含めて命あるものは，誕生から始まることに気づき，「生命の誕生」のすばらしさを実感し，極めて当たり前のこととして見過ごしがちな，「生まれることの喜び」を見出すことで「生命の大切さ」を実感していくのではないかと考えた。

今回は，第１時に学級活動で「新しい命の誕生」について知り，第２時に道徳で価値について深めるよう過程を組んだ。

視聴覚教材を活用については，第１時の学級活動において，

ア　心音を実際に聞かせる。

イ　保護者へインタビューを行い VTR として活用する。

を授業の中に組み込んだ。

心音を「何の音かな？」と問いかけながら聞かせることで，「太鼓の音」から「心の音」となり「心臓の音」と命ということに意識を向けさせることができた。

保護者へインタビューを VTR で提示することで，子どもたちは興味をもって新しい命が生まれる様子について見ることができた。また，出産や子育ての様子について，具体的な話を聞くことができ，弟や妹のいない児童も誕生や，子育てについて知ることができた。どんどん大きくなる様子を知ることで，命のすばらしさを感じ取っていた。しかし，インタビューを２人のお母さんにお願いしたが，内容的に重なるところも多く，内容を吟味する必要があると感じた。

子どもの感想や保護者の感想

・ぼくがうまれたのが，うれしかったです。たいせつにされて，うれしいです。（児）
・あかちゃんは，おなかのなかでもうごいているんだなとおもいました。（児）
・たいせつないのちをプレゼントしてくれました。たいせつにします。（児）
・授業が終わって，子どもから「ありがとう」と言われました。かけがえのないたった一つの命について考えてくれたのかなと思いました。（保）

【実践例２】友達と力を合わせること（第１学年）

資料名　「にじいろのさかな　しましまをたすける」DVD 版

（マーカス・フィスター作　谷川俊太郎訳）

この物語は「にじいろのさかな」の続編であり，銀色のうろこを持っていないしましま魚を銀色のうろこを持っている魚たちが仲間はずれにしてしまう。しかし，しましま魚がさめに襲われそうになったとき，自分たちの危険も顧みず，みんなで必死にしましま魚を助けようとする。にじうおや仲間の魚が協力することで無事にしましま魚を助けることができ，力を合わせることの大切さを感じ取ることができる。そして，銀色のうろこがあるかないかで友達を選ぶのではないことに気づくという内容である。にじうおとさかなたちの姿などを通して「友情・信頼，助け合い」や「勇気」などの価値についての自覚を深めさせるのに適した資料であると考えられる。

今回は「デジタル絵本」を活用し，スクリーンに投影した。目の前に広がる海の中の世界は，キラキラと輝き，子どもの視覚を刺激し物語の世界に引き込みたかった。そのため，できるだけ大きく投影するためにプロジェクターでの投影を行った。

視覚からの情報は，場面の理解がしやすく子どもたちが考えやすかった。また，「デジタル絵本」は，音声の中に効果音もあるため，内容理解が容易であった。また，迫力があり子どもたちの意識を引き付けるためには十分なものであった。しかし，提示の仕方として一括提示ではなく分割提示を行ったため，「早く続きが見たい」気持ちが芽生え，じっくりと考えることができない子もいたことは事実である。

上記のような課題はあったが，視聴覚教材を資料として活用することは価値に迫るための有効な手立てとなることがわかった。

【実践例３】二分の一成人式を成功させよう
（第４学年）

子どもたちは，自分のことや他者のことは大切であることは知識としてわかっている。しかし，そのこと以外のことが優先されたり，わざと大切にしなかったりすることもある。本当は自分を大切にしたいのに「どうせ，ぼくなんか」と素直になれない時もある。また，親に対して自分の思いばかりを優先し，ぶつかったりひどいことを言ったりすることもある。

そこで，子どもたちに自分のことをテーマにした活動を取り入れることした。その中には，自分の今までの歴史を振り返ることや，これからの未来について考える活動を取り入れ，自己の大切さに気づかせたいと考えた。

自分の歴史を振り返るために，今までの思いでのいっぱい詰まったアルバムから凝縮した作品を作り上げることを考えた。しかし，大切な写真なので，複製を作るためにスキャナを活用することとした。また，作品としては，フォトビデオを作ることとした。その作品は，二分の一成人式に親にプレゼントすることとした。

子どもたちは，スキャナの使い方を教えるとどんどん写真をもってきてパソコンの中へ取り込んでいった。取り込み方がわからなくて困っている児童がいると，前に取り込んだ児童がやり方を教える姿があった。取り込んだ写真を Windows の追加ソフトである「フォトストーリーメーカー３」を活用しフォトビデオにした。このソフトの良い点は，非常に簡単に作りあげられる点である。写真を画像として取り込めば，子どもたちは，写真の順番を組み立て，音楽を挿入すれば完成させることができる。

完成させた作品は，二分の一成人式で披露した。見に来てくれた保護者は，「とってもよかった。」「感動した。」と言っていた。また，涙を流しながら見てくれたお母さんたちも多かった。

子どもたちは，自分の力でこれだけの作品を作ることができたので満足であった。また，アルバムを見直したりすることで，自分が生まれたときの家族の喜びや，自分がこれまで大切にされてきたこと，また，これから家族を大切にしていきたいという思いをもつことができた。

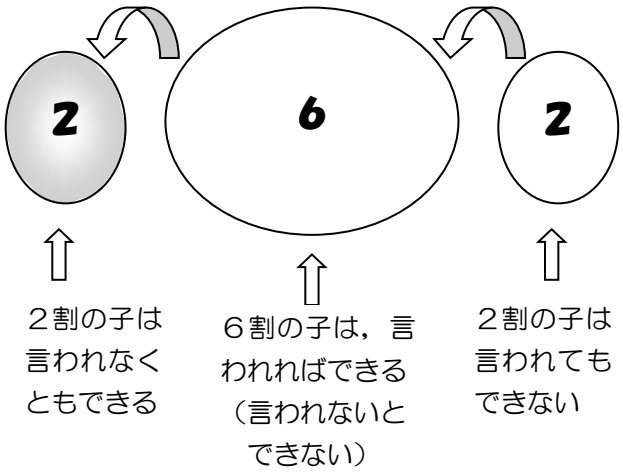
（２） パワーポイントを活用したスキルトレーニングの実践

【実践例４】ろうかは　小さな　どうろです（第４学年）

自分で自分をコントロールする（セルフコントロール）力を身につけることが大切である。セルフコントロール力を高めるためには，あたたかい信頼関係に支えられた集団づくりが大切であると考えられている。そのために，本研究においてもセルフコントロール力を高める実践は重要であると考える。

また，自分で自分のことができるようになれば，あたたかい集団を形成し，自分や他者を肯定的に認めていくのではないかと考えた。

【２：６：２の法則】



尾花沢小保健だより（２００８．３．８）より

子どもたちの様子を見ていると，廊下歩行が課題として挙げられる。そこで，「社会性を育むためのスキル教育」をプレゼンテーション形式で行うことにした。

パワーポイントでプレゼンテーションしたことで，児童の視点を集中させることができた。そのために，ねらいに迫ることができた。

また，闇雲に使うわけでなく，必要な場面での使い分けやバランスなど考え使い分けることができた。

児童は，その後廊下を歩く際に走ったりしないように意識して生活するようになった。また，他のクラスなどでも実践したいという話が多く聞かれるようになった。

【実践例５】スキル教育教材などをＤＶＤ教材化（第４学年）

新任校に転勤して，４年生を受け持つこととなった。そのクラスは，非常に元気な男子とその陰に隠れがちな女子とに分けられる。また，とても明るく前向きな気持ちで日常の学校生活を送っている。しかし，行動が短絡的で，思慮に欠ける場

合がありそれが友達同士のトラブルの原因になったりする場面もみられる学級であった。また，友達の失敗を強く非難してしまう子どもが少なくない。

「hyper-ＱＵ」におけるソーシャルスキル結果をみると「配慮のスキル」「かかわりのスキル」とも全国と同じ程度である。子どもたちは緊張感も比較的少なく自由に生活や活動をしている様子がうかがえる。その一方で，自己主張ができ，満足感を感じている子どもたちと，自分の思いをうまく伝えることができない子どもたちもいることが事実である。そこで，まずは，「配慮のスキル」を学級全体に定着させていくことが必要と考え，指導にあった。

今回は，昨年度行ったスキルトレーニングをもっとだれでも手軽に行えるよう，パワーポイントでの提示からＤＶＤのソフト化を行ってみた。ＤＶＤにする際には, Windows ムービーメーカーを使い，場面ごとにチャプタを挿入した。そうすることで，早送りで次の場面に移動できる。リモコンを使えば離れている場所でも手軽に操作できる。また，今回は他学年の児童にも出演してもらい，より現実に近いスキル学習を作ってみた。

昨年度の成果と課題をうけて，下記の３点にポイントを絞って視聴覚教材を活用した。

①場面理解でＶＴＲ教材を活用する。

②うまくできなかった場合に，場面を巻き戻して見せる。

③客観的に振り返ることができるように，子ども同士のロールプレイの様子をビデオで撮影し，視聴する機会を設ける。

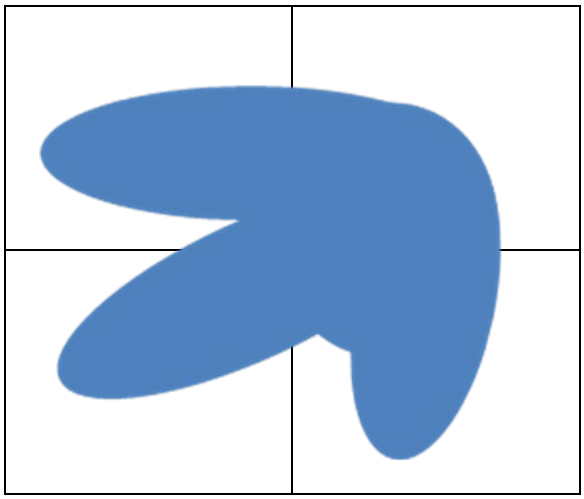
大きな画面に投影すると子どもたちは，画面に集中し場面理解しやすい。また，普段接している６年生の児童が出演しているので，なおさら注目した。上手にロールプレイができたグループの様子を投影することでより良い対処法をしっかりとスキルとして身につけることができた。また，そのグループの子も，自分がどんなことを言ったのかＶＴＲを見ながら振り返ることができた。

しかし，前任校と違い本校では，ＤＶＤプレーヤーが少ないため，他の先生が手軽に行うということはできなかった。

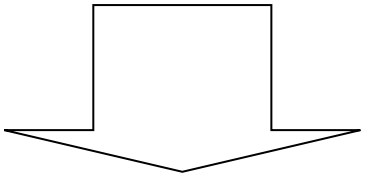
５　研究の成果と課題

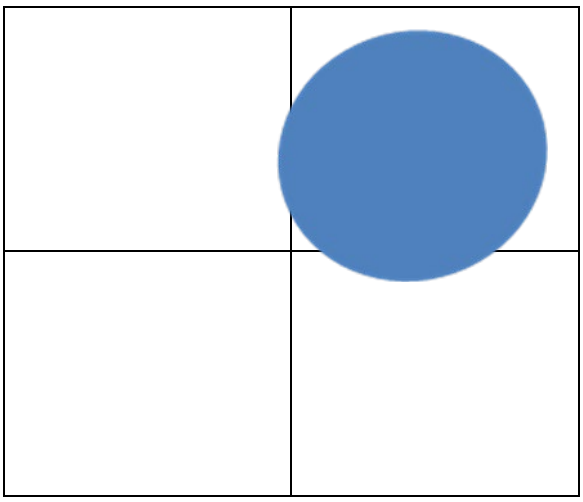
（１）Ｑ－Ｕによる学級の変容

研究初年度（第１学年）



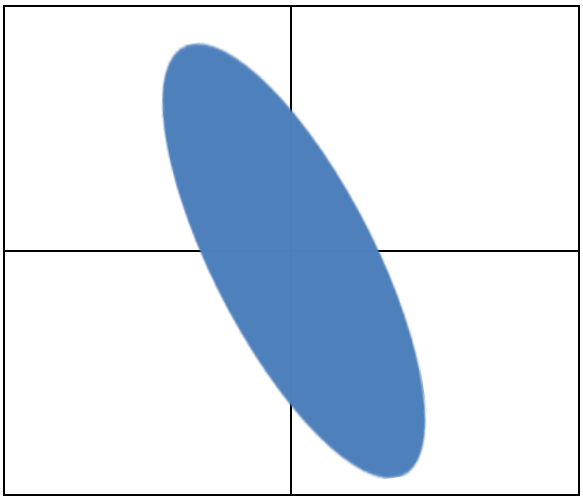
１学期は，ルールとリレーションが確立されていない状態で，子どもたちのプロットは散らばっていた。



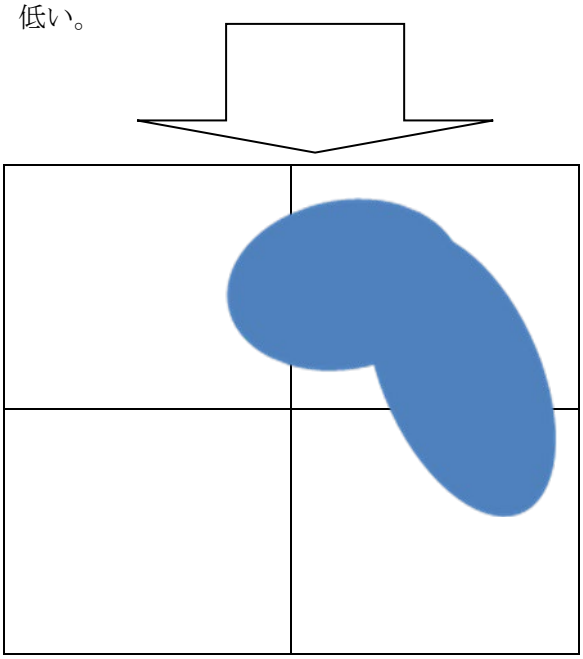


３学期には，ルールとリレーションが確立され，互いに気持ちよく生活できるようになった。また，子ども同士に仲間意識が生まれた。

研究２年目（第４学年）



４月は，侵害されている，認められていないと感じている子どもが多く，学級に対する満足感が低い。



この変容から学級集団づくりのために，視聴覚機器や視聴覚教材を活用して実践していくことは，効果が高いといえる。

（２）成果

- プロジェクターで投影することは，児童の意識を集中させるのに非常に有効な手立てである。児童の視線を一点に集中させることができる。また，伝えたい内容を効果的に伝えることができた。
- この場面ではデジタルを使い，この場面ではアナログを使うなど必要に応じて使い分けることができた。視聴覚機器の活用というと，すべてにおいて使用したくなるが，必要な場面を取捨選択することができた。また，その必要性もわかった。
- 学級集団にルールやリレーションを確立するために必要な力を，スキル教育としてプレゼンテーション形式で行ったことは，予想を超える効果があった。今後，様々なスキル教育をしていくことで，自分で自分をコントロールする（セルフコントロール）力を身につけることができるであろう。
- 自分でフォトストリーを作ることで，家族からの愛情を深く感じ，自分は大切にされているという思いを深くもつことができた。

（３）課題

- 機器の準備に時間がかかることと機器の接続への苦手意識が課題として考え，ＤＶＤ化を図り「すぐに，簡単に使える」視聴覚教材の開発を行ったが，他の先生が活用する場面は少なかった。
- 上手なＩＣＴの活用の仕方ができていず，どの場面でどう活用するか判断が難しい。
- 提示する際に活用することが多かったが，フォトストーリーを作る活動をした際，思った以上の効果があった。もっと，子どもたちに機器を活用させる実践を取り入れなければならなかった。